「『婚礼の祝宴』のたとえ」　2020 年 04 月 22 日

「そして、家来たちに言った。『祝宴の用意はできているが、招いておいた人々がふさわしくなかった。だから、四つ辻に出て行って、見かけた者は誰でも祝宴に招きなさい。』それで、その僕たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので客はいっぱいになった。」（マタイ福音書 22 章 8 節～10 節）

主イエスは、「婚礼の祝宴」の譬えを語られた。この譬えは、エルサレム神殿に巡礼に来た民衆と、その背後で、主イエスの言動の落ち度を見出し、葬り去ろうと監視する祭司長やファリサイ派の人々に語られたという文脈になっている。しかし内容を見ると、マタイ福音書を読む教会の信徒たち（マタイ教団）に宛てて書かれていると思われる。

「天の国は、ある王が王子のために婚礼の祝宴を催したのに似ている」と語り始めている。王は神で、王子は主イエスである。婚礼の祝宴は主イエスの福音で、歓喜そのものである。王は家来たちを送り、婚礼の祝宴に招いていた人々を呼ばせた。この家来たちは旧約聖書の預言者たちではないか。預言者たちを使いに出したが、招いておいた人々は拒否し、来ようとはしなかった。そこで、別の家来たちを使いに出し、「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、祝宴にお出でください」と招いた。この家来は、福音を宣教した使徒たちではないか。彼らは、食事の豊かさを伝えている。しかし、人々は招きを無視し、自分の利益を求めて、一人は畑に、一人は商売に出かけた。また、他の人は、呼びに来た王の家来に侮辱を加えた上、殺してしまった。福音宣教者たちは迫害され、殉教させられたのである。王は怒り、軍隊を送って、人殺しどもを滅ぼし、町を焼き払った。そして、王は家来たちに、「祝宴の用意はできているが、招いておいた人々がふさわしくなかった。だから、四つ辻に出て行って、見かけた者は誰でも祝宴に招きなさい」と命じた。家来たちは、通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、客はいっぱいになった。福音宣教に応じて、教会はユダヤ人も異邦人も加わり、大勢の人々でいっぱいになった。王が入って来て客を見回すと、婚礼にもかかわらず礼服を着ていない者が一人いた。王は「友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか」と問うたが、この者は黙っていた。そこで、王は召し使いたちに、「この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。そこで泣きわめき、歯ぎしりするだろう」と言われた。婚礼の祝宴に礼服を着て来なかった人は、教会に招かれながら、信仰に相応しくない人、また、福音に相応しくない振る舞いをする人であろう。マタイ教団の宣教において、色々な人が教会に招かれたが、福音信仰に反する人々がおり、彼らを教会は排除した。そのことを「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」と言ったのであろう。教会にいる人々に、福音にしっかり留まるようにとの諭しである。

主イエスは山上の説教で、「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道も広い。そして、そこから入る者は多い。命に通じる門は狭く、その道も細い。そして、それを見出す者は少ない（マタイ 7：13～14）」と、福音に招かれる人は多いが、狭い門をくぐり、細い道を通って、神の命に与る者は少ないと語っておられる。確かにそうであろう。しかし、相応しくないと排除する前に、福音に生きるように教え、諭す忍耐と努力が必要である。それなくしての排除は、教会の独善になってしまう。また、自分自身は「婚礼の祝宴」の確かな喜びに与っているかという自己検証は、もっと重要なことではないか。